令和５年度（2023年度）幼稚園評価報告書

園名	宝塚市立　丸橋　幼稚園	園長名	北　聡子

１ 幼稚園教育目標

豊かな心をもち、たくましく生きる幼児の育成

２ 重点目標

○　自分の思いを伸び伸びと表現する幼児
○　相手の話をよく聞き、思いを分かろうとする幼児
○　最後までやり遂げる幼児
○　互いに認め合い、協力して生活する幼児

３ 幼稚園自己評価結果（A：優れている　B：良い　C：おおむね良好　D：要改善）

領域	評価の観点及び評価項目		達成状況	幼稚園の取組状況・改善の方策	４ 評価項目ごとの幼稚園関係者評価
園運営	開かれた幼稚園づくり	参加人数等を考慮しながら、保護者が参加できる内容を工夫し、幼稚園教育への理解を図る。 家庭や地域への情報発信を行う。 評議員会等を開き、幼児の姿や行事を通して意見を求め、園運営に生かす。	A	感染症対策が緩やかになってきたことを受けて、保護者の願いを受け入れ、不安感を取り除くように配慮しながら、状況に応じて柔軟に実施するよう工夫した。 コドモンの活動の記録や幼児の様子をタイムリーに伝えるスマイル広場に積極的に取り組み、園教育についての理解が得られるよう努めた。 定期的に評議員会を開催し、幼稚園の状況を伝えたり、今後の園経営についてご助言をいただいたりしながら共に考え合うことができた。	コドモンの活動の記録の配信を、週２回ほどをめやすに、定期的に実施していることは評価できる。 また、家庭での子どもの話だけでは分からないことも、活動の記録を読むことで分かることはありがたいことである。 今後も継続して取り組んでいただきたい。
	子育て支援の推進	未就園児の親子同士で遊ぶ機会を設け、地域の子育て支援をする。 定期的に子育て相談を実施し、保護者支援をする。	A	園庭開放に来られた方に未就園児教室に誘い掛けたり、外部講師を招いたりして楽しいひとときをもつことができた。 入園園児数が減少しているので在宅の３歳児への保育提供を考える必要がある。 今年度は子育て相談日と未就園児教室を同日開催とし、子育て相談員の話を聞く機会を設定することができた。また、在園児に対しても困っていることがないかなど声を掛けながら、共に育てていこうとする姿勢を築いている。	在園児の子育て相談への希望がほぼないことについては、子育ての悩みがあまりなかったり、外部の方に相談するまでもない事柄だったり、他で相談したりしているのではないかと推測される。園においては、今後も保護者が話しやすい雰囲気づくりに努めてほしい。 未就園児教室の日数を再考し、未就園児親子にとって楽しい居場所となることを願っている。
	危機管理体制の整備	実情に応じた危機管理マニュアルを作成し、定期的に訓練を実施する。	B	幼稚園の実態に照らし合わせながら、危機管理マニュアルを見直し、計画を実施した。多様な想定での訓練に、幼児も職員も真剣に取り組むことができた。 誰もが日頃から危機管理意識をもち、状況に応じて素早く判断し、行動することが必要である。	子どもの目線に立って、危険がないかを考えたり、小さな怪我が大きな怪我につながるということを認識したりしながら、危険を予知し、対策を講じることが大切である。

	教職員の 資質向上	園内研究会を開催し、教職員間で学び合う機会をもち、保育力の向上に努める。	A	常に学ぶ意識をもち、意欲的に保育研究に取り組むことができた。保育記録を作成し、幼児の内面理解に努め、保護者にも自分の言葉で保育を語ることを大切にしてきた。 今後も、幼児の学びに必要な環境の構成や課題解決に向けて、教職員が互いに学びながら、協力して幼児を育てていくことを大切にしていく。	園児を教職員全員で育てていることがよく分かり、協力体制がとられている。 また、学びたい事柄を出し合いながら自主的に学ぶ意欲がもてるように取り組んでいる。
教育課程	幼児期に ふさわしい 生活の展開	個々の幼児のよさを生かしながら、遊びを通して年齢にふさわしい学びが得られる保育内容を工夫する。 幼児自身が気付いたり、学んだりできる魅力的な環境構成や援助を工夫する。	A	昨年度より異年齢で遊ぶ機会を多く取り入れたことにより、登園後に一緒にリレーをしたり、弁当後に幼児同士が誘い合って遊んだりするなど自然に関わり合う姿が見られた。 また、教師も他学年の幼児と関わる機会が増え、幼児との関係を築いたり発達を考慮したりしながら、教職員間で幼児を育てていこうとする気持ちをもつことができた。	異年齢で遊ぶ機会を多くもっていることは、行事や日々の遊びからも感じることができる。丸橋幼稚園の特色として今後も継続して取り組んでほしい。
	道徳性の 芽生えの 育成	自然や動植物との触れ合いを通して、生命の大切さに気付かせる。 友達との関わりながら、自分の思いを伝えたり、相手を理解したりする力を育てる。	B	ウサギや虫などの世話を通して命の大切さを感じながら、親しみをもって関わることができた。年間栽培計画を作成していたが、気が付くと時期を逃してしまうことがあったので、今後は時期に応じた栽培活動を実施できるよう努める。 トラブルがあったときは、本児の思いをじっくりと聞いたり、学級全体のこととして考えられるような機会をつくってきた。	栽培については不慣れな職員も増えてきているのではないかと推測される。 今後は保護者や地域の力を借りて取り組んでいく方法を考えていくことも必要ではないか。
課題教育	校種間の 連携	幼稚園の取組を伝えたり、関わりが可能なときには、臨機応変に対応し交流の機会をもったりする。	A	コロナ禍の状況が緩やかに変化してきたことから、プレ１年生の事業や、保育所・小学校との交流を再開し、継続して行うことができた。対面だけではなくビデオレターでのやりとりなど工夫することができた。また、幼保の教師間で研修会を２回実施することができ、幼児の姿を通して育ちや課題などを考え合うことができた。	保育園や小学校が隣接している立地を活かして、連携を実施していることが伺える。 また、連携の担当同士が連絡・相談しながら進めていることも評価できる。
	人権教育	人権教育年間計画を立案すると共に、学級の課題を随時取り上げて保育を行う。 教師自身の人権意識を磨き、人権尊重の姿勢で保育にあたる。	A	人権参観の機会を継続して位置付け、幼稚園での人権教育のとらえや幼児の姿や取組などを伝えると共に、保護者にも人権感覚を振り返ってもらえる機会とすることができた。 今後も一人一人が常に人権意識をもちながら保育を見直し、職員研修を積み重ねながら課題を解決していくよう心掛ける。	性別で分けたり、こうであるべきだといった思い込みであったりすることが少しずつ払拭されるされるよう、保護者と教師が共に考え合う機会として人権参観を継続してほしい。

	特別支援教育	幼児の発達に即した指導や援助を工夫する。	B	個別の支援計画を立案し、具体的な手立てを考え、教師間の連携を図りながら援助することに努めた。また、幼児の実態に沿って支援の手立てを工夫することができた。 保護者とは、送迎時や電話などで幼児の育ちや課題を共有し、連携を取るよう心掛けた。	発達に合った支援を行うことで、幼児が落ち着いて生活し、皆で成長している様子が感じられる。 今後も幼児が共に成長できるように支えてほしい。

5 幼稚園評価の実施方法についての幼稚園関係者評価

行事ごとに保護者や来園者へのアンケートを行い、意見を聞く機会をつくっている。それらを基に評価を行っているので、実施方法は適切である。

6 総合的な幼稚園関係者評価

４歳児と５歳児の人数に差があるため保育内容等の苦労もあると思われるが、異年齢保育を取り入れるなど工夫して園運営を行っていた。

⑴ 評価の観点及び評価項目設定については、各園の実情に応じて、また各園独自の言葉で設定・作成してください。
⑵ 幼稚園が「１」「２」「３」をとりまとめて学校関係者評価委員会で説明し、学校関係者評価委員会は、評価の結果を「４」「５」「６」に簡潔にまとめ、園は学校関係者評価の結果を踏まえて報告書を作成し報告してください。また結果の公表に努めてください。